

幕末明治の「アメリカ」受容

ペリー来航以降、約百六十年におよぶ歴史のなか、日本とアメリカは「不思議な関係」（高坂正堯）を築いてきた。日米は激しく敵対し、核兵器まで使用した凄惨な戦争を経験しながら、両国の政府は「世界のなかで最も重要な二国間関係」と公言して憚らないほどの同盟関係を構築してきた。近年TPPや安全保障政策の問題から日米関係をより一層強固にしようとする様々な政治的な動きがあるが、賛否の別なく情緒的な意見が先行している。今こそ学問的・理性的に日米関係史を見つめ直すことが必要であるが、政治史・外交史研究からの蓄積は厚いものの、思想史からの研究はそれほど多くない。

本パネルセッションでは二つの発表を通じて幕末明治の

「アメリカ」受容を考察した。はじめに「幕末明治のリンカン受容」と題して陶徳民が発表した。

陶 徳 民
大 川 真
大久保 健晴

報告者がリンカン（一八〇九―一八六五）に関心を抱いたのは、一九九〇年代前半にマサチューセッツ州 Bridgewater State College（伊沢修二の派遣留学先）の助教授を務めていた際、同僚の Thomas Turner 教授の影響を受けたからである。二〇〇九年七月オックスフォード大学で開かれるリンカン生誕二〇〇周年を記念し世界各地に波及したその影響を検証する国際シンポジウムが開催されたが、報告者は由緒のある明星大学「東京リンカンセンター」所蔵の豊富な資料を利用して参加報告を書いた（会議論文集 The

Global Lincoln は既刊)。

リンカンのロールモデル(立身出世とリーダー精神)や政治理念(民主主義と人種差別撤廃)は、近代日本人の人人に深い影響を及ぼしたが、関連研究が不十分である。リンカンの精神を理解するために、まず同時代の「西学東漸」潮流においてイギリス主導の大西洋・インド洋經由のルートに対し、アメリカ発の太平洋經由のルートもあったことに注目すべきである。ペリーの蒸気船がもたらした電信・鉄道の模型が象徴するように、これらの先進技術が地球を丸くさせ、東西の人々を繋ぐ重要な役割を果たした。ホワイトハウスの大統領執務室に常備していた『ペリー艦隊日本遠征記』や大陸横断鉄道ルート探查記などの議会文書が、日本に及ぶ「西進運動」に対するリンカンの強い関心を物語っている。そして、南北戦争中にゲティスバーグ演説や奴隷解放宣言を敢行したその決断に、鉄道枕木を作る労働者、水夫、測量士、郵便配達人など社会底辺部での職業遍歴の体験があった。正にそのリンカンが両都両港開市開港の延期を求める將軍家茂に対して、“Great and good friend”という対等の呼称で始まる返事をし、また執務室で元漂流民のジョン・ヒコ(濱田彦蔵)と握手し日本事情に関する多くの質問をした。リンカンが暗殺されたことに対して、家茂は米國代理公使を通じて“the profound sentiments of pain”と

の弔意を表し、ヒコはいち早く『海外新聞』で報じたことは、その人格に感化されたためであろう。横浜開港以降の四半世紀中、来日プロテスタント宣教師三百余名の大半がアメリカ人であり、バラ塾で入信し内村鑑三の後任として北越学館の教頭を務めた松村介石が、一八八九年『立志の礎』の続きで翌年に『阿伯拉罕倫古龍』という最初のリンカン伝記を出したのは決して偶然ではなかった。度重なる増刷と再版をされたこの伝記は、森有礼暗殺や内村「不敬事件」などと共に、明治中期の教育界・宗教界でピークに達したアメリカの影響とそれへの反発の象徴だと考えられる。一九〇三年の国定『小学修身書』に盛り込んだリンカン物語はその余波と言えよう。

続いて、幕末明治でアメリカのデモクラシーが制度面でのように受容されたのか、とりわけ代議制度や首相公選制に対する理解をテーマに「決め方」の思想史——幕末のアメリカ体験を中心に」と題して大川真が発表した。

日本の民主主義の導入の歴史は第二次大戦後から語られることが多い。本報告はかかる通念とは決別し、幕末明治期の日本で民主主義に関わる制度や思想がどのように受容されたのか、特に議会政治の根幹をなす、意見集約の方法(決め方)がどのように理解されたのかに焦点を絞り論じ

たものである。

ところで幕末明治期において議会制に関してはいギリスの上院下院制がいち早く紹介されているが、議決の方法や代表選出の手續きについての紹介は見られない。これらが紹介されるのは新興の共和国であるアメリカについての記述である。報告者が特に注目しているのは、『海国図志』の「和解本」である。単に訓点を施したものと異なり、漢語に和語のルビであてており、西洋由来の様々な政治用語をどのように日本語訳していったのかをつぶさに窺うことができるのである。正木鶏窓（篤）『美理哥国総記和解』（二八五四年刊）も当時流布した代表的な和解本であり、アメリカの議会政治や大統領制が紹介されている。この書で注目すべきは、議員は多数決制による議決をメインにするのではなく、「評議」を役割としているという正木の理解である。こうした理解は明六社メンバーである神田孝平にも共通し、神田は『中外新聞』一八六八年四月二七日号に発表した「江戸市中改革仕方案」において、議決に際しては代表者による評議を行った上で、全会一致による決定に正当性を見出す。全会一致をベースにした議会政治は未成熟なものに思われるかもしれないが、ステークホルダー全員のコンセンサスを得るために、アカウンタビリティの履行や熟議が行われる可能性を歴史的に有してきたのも事実

である。

最後に両報告を受けて、大久保健晴がコメントした。黒船来航以来の日本とアメリカの歴史を顧みたとき、興味深いのは、一八六〇年代中葉より一時期、日本の政治外交の表舞台から、アメリカの影が消えた（ように見える）ことである。少なくともアメリカは、近代国家のモデル国として、明治日本に多大な影響を与えるには至らなかった。アメリカが再び大きな存在として意識されるのは、門戸開放・機会均等を掲げ、西欧列強と日本が鎬を削る中国の分割に介在する、二〇世紀初頭である。この時のアメリカは、もはや一九世紀半ばの、いまだ開拓すべきフロンティアが残る世界の片田舎の国ではなかった。ヨーロッパの黄昏から満州事変、日米開戦へと至るその後の歴史は周知の通りである。ペリー来航後、一八六〇年代中葉から「アメリカの世紀」の出发点である二〇世紀初頭までの約四十年の空白をどう捉えるか。これは日米関係史の最重要課題の一つである。

この空白の原因こそ、一八六〇年のリンカン大統領就任と、南北戦争勃発であった。そして戦争終結後、先進的な工業国に成長し、西へ西へと開拓を進めたアメリカが、その先に見据えたのが極東アジアであり中国であった。一

九一年成立の中華民国は、アメリカで“Sister Republic”と歓迎された（北岡伸一『門戸開放政策と日本』）。このように考えると、リンカンを取り上げた陶報告、共和政体と民主主義を論じた大川報告は、ともに日米関係史の空白を埋める貴重な研究成果である。

以上の問題関心から、陶報告には第一に、明治期のリンカン受容と東洋思想の連関について質問した。例えば一八九〇年に松村介石が著した日本初のリンカン伝。そこで強調されるのは、民主主義の政治理念などではなく、天の御心を奉戴し、徳を涵養し、立身出世するリンカンの姿である。奴隸制は「天理人道に悖る」。後に松村は「儒教的キリスト教」を唱え、彼が設立した日本教会・道会には大川周明も携わった。これは、『西国立志編』でフランクリンを紹介した中村敬宇と重なる。その意味でリンカン受容は、近代日本における儒学の一応用形態と言えないか。

二点目は、リンカン神話との関連である。シュウウォーツ氏の研究（Barry Schwartz, *Abraham Lincoln and the Forge of National Memory*）等によれば、リンカンの生涯は六五年の暗殺により物語化され、さらに二〇世紀初頭、T・ローズヴェルト大統領らの手で、世界に冠たる帝国アメリカの国民的英雄として神格化されていく。実際、一九〇二年にリンカン記念堂建設が計画され、〇九年に生誕百周年式典

が催された。他方日本では、一九〇三年の国定『高等小学修身書』でリンカンの実績が取り上げられるが、日露戦争を挟んで〇九年の改訂版では、リンカンの名は消え、「忠君愛国」が前面に出る。これは一見対極的だが、ナショナリズムの強化という点で、両国は同じ方向を向く。その後、アメリカで黄禍論が巻き起こり排日移民法が可決されると、リンカンに親しんできた新渡戸稲造は、二度とアメリカの土は踏まないと怒りを示した。この日米関係の転換点における、非対称的なリンカン物語の行方について、陶会員の見解を尋ねた。

大川氏には第一に、報告で検討されなかった、連邦制と地方自治、及び『分権論』を通じた福沢諭吉による「アメリカン・デモクラシー」（トクヴィル）との取り組みについて質問した。というのも、これこそ東アジアの「封建」「郡県」に関わる（中田喜方「政治学からみた「封建」と「郡県」」、明治初年の「アメリカ受容」の中心的課題ではなかったか。第二の論点として、報告の中で強調されたように、確かに日本でも古代より全会一致の他、多数決や統裁合議などの意見集約の伝統が存在した。だがデモクラシーは、「決め方」の問題のみに還元されない。問われるべきは、開国以降、議会制導入に際し、どのような伝統的資源がいかに関用されたかである。それは、前田勉氏が解明す

る会読の伝統か。水谷三公氏が指摘する江戸の入札の制度か。寺院における「多分の義」か。あるいは利光三津夫氏が説く町方・村方社会の寄合決議の方法か。さらにそこで求められたのは真理の探究か、利益の調整か、敵対勢力からの権力奪取か、全体的な秩序の安定か、議論を行った。

(陶徳民・関西大学教授)

(大川真・吉野作造記念館館長)

(大久保健晴・慶應義塾大学准教授)